

氏名	喜多 宏丞
ヨミガナ	キタ コウスケ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第254号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	<p>〈論文〉 セザール・フランク：ピアノ書法の分析に基づくオルガン作品及びオーケストラ作品のピアノ独奏編曲</p> <p>〈演奏〉 オルガニスト FWV41より</p> <p>ニ長調とニ短調による7つの小品 第4番「古風なクリスマス」 L'Organiste FWV41</p> <p>7 Pieces en ré majeur et ré mineur no.4 “Vieux Noel” 交響曲 ニ短調 FWV48（ピアノ独奏編曲 喜多宏丞） Symphonie d-moll FWV48 (Transcription for piano solo by Kosuke Kita)</p> <p>I Lento - Allegro non troppo</p> <p>II Allegretto</p> <p>III Allegro non troppo</p> <p>オラトリオ『贖罪』FWV52 より</p> <p>第2部 第1番「交響的間奏曲」（フランク自身によるピアノ4手版） Rédemption FWV52</p> <p>2e partie no.1 “Morceau symphonique”</p>

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	角野 裕
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角 欣矢
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	野平 一郎

（論文内容の要旨）

本研究は、セザール・フランク（1822-1890）のピアノ書法を詳細に分析し、それに基づいて彼のオルガン作品及びオーケストラ作品のピアノ独奏編曲を作成・演奏するものである。これにより、ピアノ奏者にとってのフランクのレパートリーを拡充するとともに、「編曲」という概念そのものについても、新たな考え方を提示しようと試みる。

フランクのピアノ音楽は、多くのピアノ奏者にとって極めて重要なレパートリーであり続けている。しかし、フランクが遺したピアノ独奏作品は少なく、また、青年期のヴィルトゥオーソ・ピアニストとしての活動を通して生み出された真に個性的とはいえない作品群から、晩年の傑作が作曲されるまでの間に、約40年にわたって「ピアノ独奏」という分野がほとんど創作の対象とならなかった、いわば「空白の期間」が存在している。これは、フランクの音楽をより深く知り、またその魅力をより広く発信してゆきたいと願うピアノ奏者にとって、極めて不十分な状況である。

本研究では、フランクが遺した他ジャンル（オルガン及びオーケストラ）の作品から、彼の音楽が持つ魅力に様々な側面から触れることのできる5曲を選び、ピアノ独奏へと編曲する。《 Pièce symphonique 》(FWV24 No.26)、《 Andantino 》(FWV25)、《 Grande pièce symphonique 》(FWV29)、《 Pièce Héroïque 》(FWV37)の4つのオルガン作品は、いずれもフランクのピアノ独奏音楽における「空白の期間」に作曲されたものであり、そのピアノ独奏編曲は、彼の音楽を多角的・包括的に捉えようとするピアノ奏者に、ささやかな「道標」

を提供しようとするものである。そして、最も大規模な器楽作品である《交響曲》(FWV48)のピアノ独奏編曲は、本研究の集大成であるとともに、「ピアノ独奏」という演奏形態の持つ可能性への挑戦でもある。

第1章では、編曲作成の狙いとコンセプトを確認する。編曲に当たって筆者が留意したのは、それぞれの作品をあくまで「フランクのピアノ音楽」として響かせた上で、作品本来の魅力を聴き手に余すところなく届けることである。そのためには、フランクのピアノ音楽の魅力、あるいはピアノ音楽における「フランクらしさ」が、彼の音楽のいかなる特徴に由来するのかを、慎重に検証する必要がある。本研究では、フランクのピアノ書法を読み解くために、ピアノ独奏作品だけでなく、ピアノを含む編成の室内楽や、オーケストラ作品の彼自身によるピアノ4手版を含む、全てのピアノのための創作を分析対象とした。書法の分析に際しては、動機、旋律、和声、あるいは作品の構造といった従来の楽曲分析で重視されてきた視点よりも、響きの印象、音域の配分、伴奏音型の選択といった、奏者及び聴き手の感覚とより直結した視点を重視した。

第2章では、ピアノ独奏の書法に関して、使用音域の傾向、左右の手の部分的な交差の頻度、運動量の多寡等、身体性を加味した多角的な視点から、フランクが好んだ響きや動きの傾向を算出し、リスト、アルカン、ブラームスと比較検証した。その結果、彼のピアノ書法が、音域をコンパクトに用いながらも高い運動性をそなえた、「密度の高さ」を重視したものであったことが明らかになった。

第3章では、編曲作成の過程を、考察の前提となる分析とともに、詳細に記してゆく。オルガン作品の編曲では、レジストレーションの変化を出来る限りテクスチャに反映させるとともに、長い音を減衰させずに保持することができない、というピアノの短所を、細やかなアルペジオやパッセージを明瞭に発音し、ニュアンスを自在にコントロールできる、という長所で補うことで、ピアノ音楽として自然で説得力のある響きを目指した。《交響曲》の編曲では、フランク自身によるピアノ4手版に見受けられる、オーケストラ版とは異なる「ピアノ版のための」アイデアを活かすことが最も重要な課題であったが、4手版のアイデアが「2手では機能しない」と判断した場合は、フランクの他のピアノ作品を参考に、フレーズに最も説得力を持たせられるテクスチャを創出した。

第4章では、作成した編曲に対して、第2章と同様の分析を行い、フランク自身のピアノ書法と、筆者が編曲で用いた書法の整合性を確認した。

ピアノ書法をただ「理解する」だけでなく、その書法を編曲に「応用する」という観点からの考察は、フランクのピアノ音楽のみならず、ピアノという楽器そのものの特質をも明らかにするものである。「ピアノ編曲」という行為を通して、「ピアノ独奏」という演奏形態の持つ魅力に新たな角度から光を当て、より多様で充実した音楽体験を生み出すために演奏家が模索すべき様々な可能性に新たな広がりをもたらすことが、本研究の目指すところである。

(総合審査結果の要旨)

本研究は、ピアノのためのオリジナル作品の少ないセザール・フランクの創作に、彼のオルガン作品4曲ならびに交響曲ニ短調のピアノ独奏用編曲を作成することで、ピアノ奏者にとってのフランクのレパートリーを拡充することを目指したものである。その目的のために、これらの編曲が単なるピアノ・リダクションではなく、あたかも「フランクのピアノ音楽」であるかのごとく響き、原曲の持つ魅力を十分に聴き手に届けることの出来るものとなるように意図されている。論文はこの目的をどのような考察と検証によって実践したかを詳細に述べている。編曲の前提として、フランクのオリジナルなピアノ作品はもとより、ピアノを含む室内楽や、管弦楽作品のフランク自身によるピアノ4手用編曲を丹念に観察・分析し、フランクのピアノ音楽の語法を踏まえた編曲作りの立脚点が構築されている。編曲の個々の部分を作成するにあたってはフランクのどの作品のどの部分の、どのような書法的特徴を根拠としたかが詳細に記されている。この膨大な作業は、主として和声構成音の配置や音域の配分、内声や伴奏部分の音型の選択と言った、響きのありさまに関するさまざまな検討が中心となっており、常に「響きの意味合い」を吟味するという、演奏家にとって必須の作業が、具体的な考察と的確な音楽的判断で記されている。また、ピアノ編曲を創出することが最終的な目的でありながらも、その過程でフランクの音楽の個性的本質がさまざまな視点から明らかにされており、フランク研究としても大きな成果を示したものとなった。学位審査会の演奏の中核を成したのは、本

研究の集大成と言える「交響曲ニ短調」の編曲の演奏であった。この交響曲には、作曲者によるピアノ4手版があるが、オーケストラ版とは違ったピアノ・ヴァージョンならではの表現法を持つ部分があり、また4手ではなければ実行できない部分も多々あるが、喜多宏丞の独奏用編曲は、フランクのアイデアを援用しつつ、2手ならではの対応に優れた音楽的センスを発揮し、編曲者のインスピレーション溢れる独創的な筆致は、編曲に新鮮な創造性と高い効果を与えている。演奏はピアノ独奏として極めて難易度の高いものとなっているが、無数のポリフォニーと変幻自在な和声法に満ちた大曲を鮮やかなピアノリズムと格別な集中力をもって暗譜演奏し、フランクの交響曲の持つ本質的な感動と、ピアノ独奏という演奏形態の持つスリリングな魅力とを同時に堪能させた傑出したものであった。編曲・演奏、論文ともに博士の学位を授与するに値する極めて優れた成果であると判断する。